

表4 人工種苗放流後の追跡調査の実施状況

放流回次	観察年月日	放流後の経過日数	観察側線	観察距離 (m)	観察時間 (分)
第1回目	1984年				
	9月28日	1日目	R-1,	2,200	178
	9月29日	2日目	R-1, R-2	2,200	199
	10月3日	6日目	R-1, R-2	2,200	200
第2回目	11月2日	1日目	0-4,0-4,0-4"	2,200	206
	11月3日	2日目	0-4,0-4,0-4"	2,200	204
	11月6日*	5日目	0-4,0-4,"	970	98
	11月14日	13日目	0-4,0-4,0-4"	2,200	122
計				14,170	20時間7分

* 時化のために途中で観察打ち切り。

(2) 結果と考察

a) 第1回目放流後の潜水調査

放流点付近の海底はサンゴ起源の岩、礫、砂地で、植物はウミヒルモやホンダワラ類が散在する程度である。放流時は張潮の低潮時で、水深は2mほどであった。放流点の周囲には、目測で全長12~15cmほどのハマフエフキの天然幼魚が多くみられた(図7, 8)。

放流魚は輸送用生け簀の底面をはずすと、落下するようにまっすぐ海底まで泳ぎ、付近にいくつかの群れを形成した。群れは放流点付近を遊泳していたが、その内のいくつかの群れはどこかへ行った。約1時間の観察終了時には、放流点付近には放流魚数の3分の1ほどが残っていた。また岩影に隠れる個体も数は少ないが観察された。天然のハマフエフキが頭をやや斜め下にして泳ぐのに対して、放流魚はいく分斜め上に向けて泳ぐ違いがみられた。また放流魚の遊泳時の体の動かし方は、天然魚のそれに比べて、どことなくぎこちなく見えた。

放流後1日目は放流点付近に4~9個体の小群といくつかの単独個体が観察された。測線上で観察されたのは、わずかに18個体であった(図9)。1個体がアマモ場内の天然のフエフキダイ類、ヒメジ類、アイゴ類、ハラスジペラの幼魚などから成る混合群中にいたほかは、すべて岩についていた。このように岩につく行動は、天然のハマフエフキ幼魚では通常みられない。測線観察後、放流点から岸寄り側に帯状に分布するアマモ場を2人で1時間ほど捜したが、放流魚は1個体しかみられなかった。

放流後2日目は放流点に7個体の小群とその付近に単独個体が2個体、計9個体が観察されたのみであった(図9)。1日目と同様に1個体はアマモ場内で他種魚との混合群中に、ほかのものは岩についていた。この時には放流点付近で腹部が異常に肥大したマダラエソが観察されている。

放流後6日目には側線上には放流魚はまったくみられず(図7,8)、付近のアマモ場でもみ

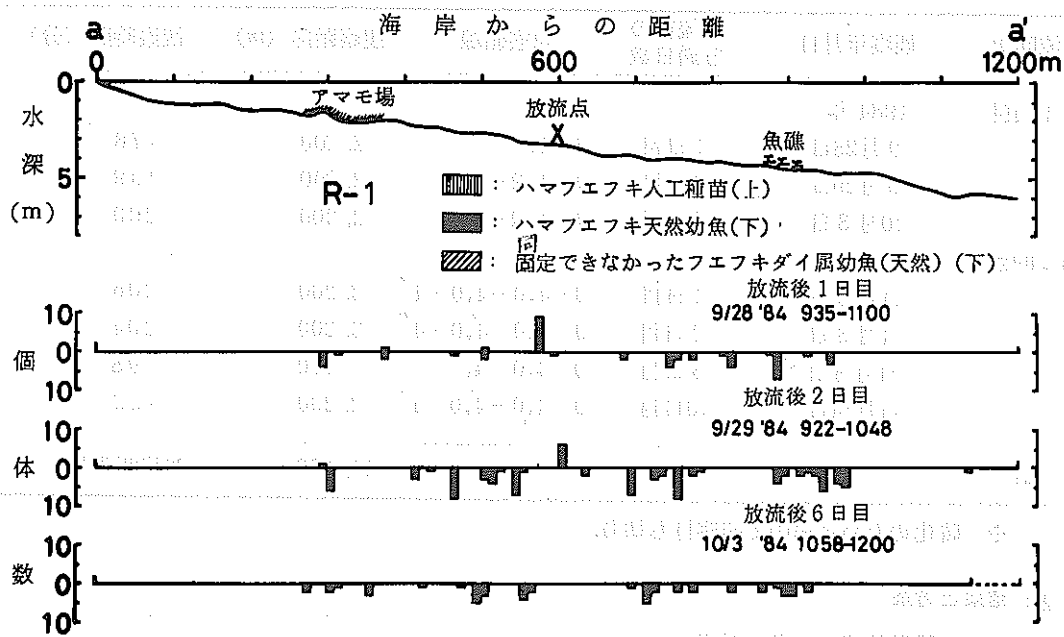


図7 第1回目人工種苗放流後の側線R-1上での放流魚とハマフエフキ天然幼魚の分布

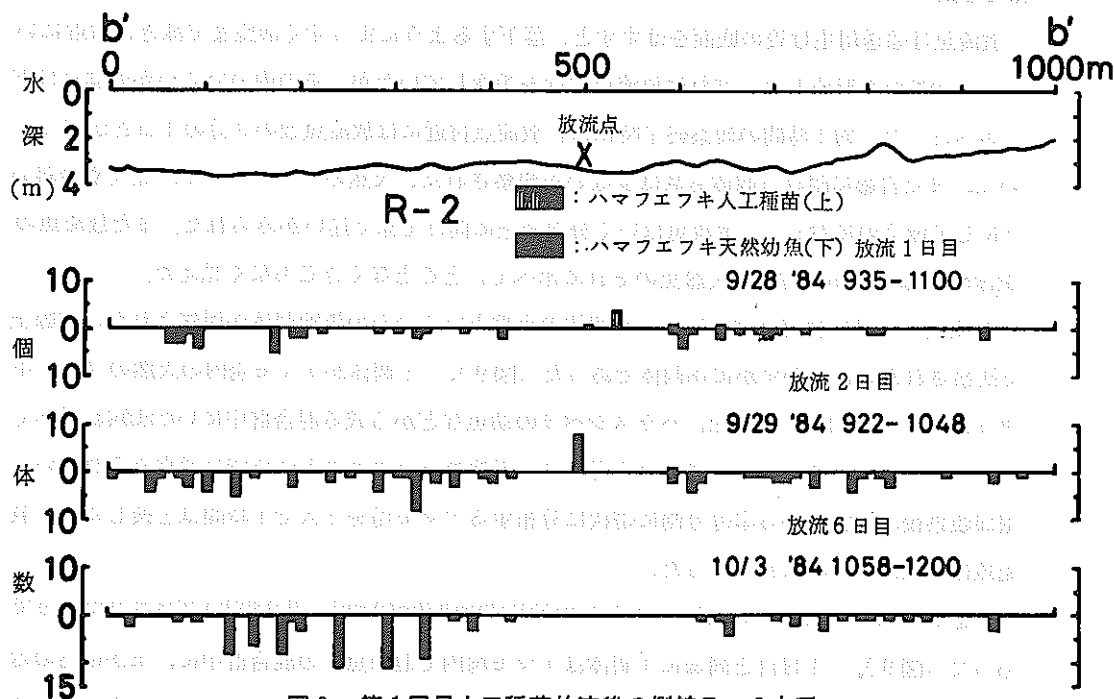


図8 第1回目人工種苗放流後の側線R-2上での放流魚とハマフエフキ天然幼魚の分布